

令和3年1月1日発行 春燈/第76巻第1号(毎月1日発行) 昭和25年7月22日第3種郵便物承認

2021 January

1月号

春燈



成瀬櫻桃子の句

くらはんかの皿の厚手や蕪村の忌

『素心』昭和五十六年

くらはんかの皿とは、江戸時代に淀川を往来する三十石船の乗客相手に小舟で「食らわんか食らわんか」と声を掛け、食べ物を売る商いに使われた皿である。船上で転がらぬよう肉厚で素朴な風合豆を持ち庶民に愛された。その皿に師は蕪村の句の诗情に富んだ大らかさを感じ蕪村の忌を取り合わせたのであろう。陶器にも造詣の深かった師ならではの句だ。

大文字孝一

成瀬櫻桃子の句

ピサの斜塔に傾き合はず夏木立

「素心以後」平成十一年

イタリアのピサにある大聖堂の鐘楼で、建築中に地盤が緩んだ為次第に傾斜して、そのままの姿で建っている。私もこの場に立った時、驚きと崇高感に浸った事を思い出した。この特異な姿で建つ斜塔に、傾きを合わせた夏木立が、美しい景となり、斜塔の偉大さを保ち、かつてのピサの栄華の時代を偲ばせている。

成瀬櫻桃子先生の優しい目差と包容力を感じました。

池上昌子

安立公彦

ひと本の松を遠見に秋惜しむ

去来抄読むや暮秋の灯明りに

口切の窓に茜の筑波山

吹く風の暮色を呼ぶや花八手

石路の影をひとつに一葉忌



燈下集

○ 浅木ノエ

かはたれを月の匂ひの白き猫
かりそめに置くキャンパスの露に濡れ
空き箱にたまるリボンや小鳥くる
ふり返り振返り消ゆ秋日傘
夜寒さの指に吸ひつく広辞苑

○ 懸林喜代次

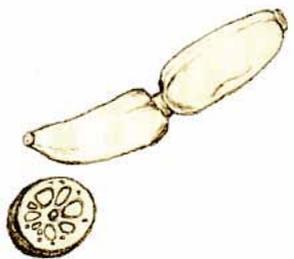
魯田にバドミントンや兄いもと
百歳の媼を祝ふ菊枕
渋滞や昏れて着きたる紅葉山
文化人でふ奇妙な言葉文化の日
黄落やこの辺芭蕉の終焉地

○ 豊谷ゆき江

毬栗やわんぱく坊主の泣き所
今日もまた母に手紙や小鳥来る
ホットケーキに蜜たつぷりと冬隣
文集の旧仮名づかひ文化の日
七曜を事なく過ごし神の留守

○ 中村紀美子

コスモスの千のさゆれや音もなく
ひざがしらそと手で被ふ暮の秋
父の猪口に注ぎてしみじみ温め酒
足裏の小さき音や銀杏散る
朝寒や熱き宇治茶を亡母に汲む



○ 後藤真由美

鯉木も千木もゆかしや小望月
月に棲む兔親しき今宵かな
叢雲の去りて良夜や閑八州
行間のこころ読みとる夜長かな
木犀や光まみれの香を放つ

○ 川崎真樹子

月今宵影絵の狐鳴かせもし
林檎剥く刃先に詩語の予感かな
血縁とふ息苦しさや鶏頭花
鏡冷ゆ母にも父にも似ておらず
八百万の膝送りかな神在月

○ 木村梨花

大屋根にまじろむ鳩や菊日和
父あらば松の手入れの終はる頃
烏瓜こんがらがつて真赤かな
秋時雨滲みて届く男文字
すれ違ふ人の温みや冬隣

○ 溝越教子

秋草を朝の厨の硝子壘
小鳥来る子が子を見せに昼餉時
秋日濃し椅子に長居の影ひとつ
声張りて歌うてみたき薄原
離れ住む子らも見入るやけふの月

○ 齋藤晴夫

山茶花の音なく散りて暮れやすし
酔芙蓉色に出る花出ない花
不肖の身何故に生かさる草の絮
銀杏散り延喜の社はなやげる
残されて並ぶ影なし十三夜

○ 河崎國代

露の世に犇と著きや足の跡
背もたれの銀の一筋木の葉髪
ぢぢばばの存ふ平和ちゃんちゃんこ
立冬や眼力の鋭き二王像
標なき枯野の果ての薄明り

○ 上野進

早や晩鐘撞けとばかりに酔芙蓉
流れゆく落葉の運ぶ日差しかな
陽当りて野にコスモスの大合唱
折り返し己が影踏み秋耕す
風韻や木の実は森の涙とも

○ 永井恵子

稲架立つや高千穂峰雲もなし
身に入むや祖父の写真のセピア色
触らせてもらふ胎動秋の昼
爽秋の佳き日に吾子よ生まれこよ
湯気立てて旅にころがる衣被

○ 石橋邦子

十三夜風の抜けゆくつくばみち
蟪蛄の枯るるに早き歩みかな
泡立草人をかくしてしまひけり
行く秋の庭を掃きぬる白秋忌
農の師の厳しかりけり新生姜

○ 荒井ハルエ

艶やかに館練り上がる十三夜
桐一葉侍みの人のまた逝けり
身に入むや家族葬でと届く文
水口をすべりゆく藻や落水水
いつの間に月昇り来る大花野

○ 河本山紀子

望郷や母の忌日の天高し
爽やかや即かず離れずのえにし
空き缶ひとつそつと転がる秋の浜
病み居ても子らと交はせし菊の酒
「菩提樹」の洩れくる校舍秋惜しむ

○ 石田康明

天高し墓石映ゆる祥雲寺（遺族へ）
日暮の膝笑はする下り坂
村祭鹿の子絞りの帯どうし
食パン店へ朝寒を来て深呼吸吸
秋しぐれ屋台に匂の一尾揚げ

余言 安立公彦

恬淡と吹かれてゐたり捨案山子 西川 保子

最近、案山子を見ることも少なくなつたが、それは当方の出不精の故、秋の稲田には今も案山子が鳥の張り番をしていよう。稲刈りも終わった櫓田に、ひとつぼつんと立っている案山子。一度見たら忘れられない景である。

作者は今、旅の途次。そういう案山子に見入るのだった。「恬淡」は、「心が安らかで欲のないこと」。そう言われてみると、この語はどの案山子にも通う。更に中七の「吹かれてゐたり」が、その思いを充分に満たしている。「捨案山子」の姿が、ひと際旅情を深くする句だ。

きれぎれの真夜の覚醒つづれさせ 卜部 黎子

この句を見ていて納得する人も多からう。睡眠は生きて在る限り、生命の維持には欠かせないものである。しかし時に、「きれぎれの真夜の覚醒」もあり得る。安住先生の『柿の木坂雑唱以後』に、〈片割月窓に探して不眠症〉とい

う句がある。昭和六十一年の作。

掲出句。「つづれさせ」とあるから、庭で鳴く蟋蟀の音が聞こえているのだ。長い夜半にはこういう経験もあろうが、それを一句に昇華するという思いに共鳴する。

芒原日の入る山の影のこし 江草 礼

写生の効いた句である。一面に芒の生い茂った草原。その先には低い山が連なっている。日暮も近く、空はうっすらと茜に染まつている。

今、その芒原に山の影が落ち出す。「日の入る山の影のこし」は、その景をしっかりと捉えた表現だ。作者は、この中七下五を充分に味わったあと、「芒原」の上五に戻るのだ。この句は、「写生」の善さを良く示している。

椿の実ぬれて厳か剃度式 本多 遊方

「剃度」は、剃髪得度すること。僧（尼）となること。剃髪は元より髪を剃ることであり、この場合は、「仏門に入つて髪を剃ること」である。

作者は仏門の住持職に在る。剃度式が如何なるものか、門外の私たちには分からないが、仏門に入るといことは、会社の入社式とは基本的に異なると、推察出来よう。山本

健吉は歳時記の「椿」の解説に、「椿は日本で春を代表する神聖な木の意をこめて、ツバキに当てた」と記している。「椿の実ぬれて厳か」の意味も理解出来よう。

去來の墓訪ぬる畦や柿日和 小泉 三枝

向井去來の死は、宝來元年（一七〇四年）九月一〇日。長崎の儒医の息、京都に住み落柿舎を営む。墓は洛東真如堂の向井家の墓所に在つたという。蕉門十哲の一人。「春燈」の先達である牧瀬蟬之助氏に、〈まだすこしここにをりたき冬日かな（去來の墓）〉という句がある。

作者は今、その去來の墓所を訪ねている。『去來抄』や『旅寝論』の著書があることなど、考えつつの墓参だったのだろう。「柿日和」に去來への親愛の思いが出ている。

病窓に希望の光色鳥來 清水 美子

作者の十月号の句に、〈病む夫婦言葉少なに土用風〉という句がある。掲出の「病窓」は、未だ病状が治まらないことを示している、しかし、今ふと窓を見ると、窓外の空高く、色鳥の渡りを見るのだった。「色鳥」は秋の小鳥の美称、文字通り色取りの美しい、四十雀、ひたぎ、椋鳥などを指す。まさに「希望の光」である、「病窓に希望の光」が、善く思いを表している。快癒を願うばかりだ。先達の

句を一句。〈色鳥や買物籠を手持てば 真砂女〉。

離れ住む子らも見入るやけふの月 溝越 教子

この句を見て頷く人は多からう。事ごとに離れ住む子に案じるのは、即親心である。それが、十五夜なら猶の事である。作者の親心が身に沁みる。

周知の通り、作者は今、春燈誌の表紙絵を描いている。平成三十年の沼田桂子氏に続く、伝統ある春燈誌の表紙絵である。手にすると、その色彩の明るさに暫し瞠目する。彩りが善い。時に虫喰いの一葉のあるのも善い。令和三年の表紙絵も出来上がっている。楽しみだ。

稲架立つや高千穂峰雲もなし 永井 恵子

「高千穂峰」は、宮崎県南部、鹿児島県境に近くそびえる火山。標高一五七四メートル。天孫降臨伝説の地である。瓊々杵尊が、天照大神の命を受けて高天原から天降つたと言う神話の世界の地である。頂上に天の逆錐がある。山麓にある霧島神宮は元官幣大社。祭神は瓊々杵尊。

作者の住む都城から高千穂峰は北西の地に当たる。一面の秋の田は刈入れも終り、遠近に稲架が立っている。日本の原風景とも言えよう。こういう句を見ていると、新型コロナウイルスの世相を暫し忘れ去る思いがする。

春燈賞（抄） 25句 自選

田中嘉信



霞敷く丹沢の嶺々富士真白
黒々と老いたる幹や梅真白
うしろ向きに走る少年いかのぼり
はくれんや千の観音在すかに
爪弾けば微風に散る松の花
彩りもて街を縁取る郷濁かな
葉桜や屋形行き交ふ隅田川
白薔薇の白の陰影朝日影
彫り深き紅薔薇ゆらり夕日影
母抛るボール追ふ子や新樹光
木洩れ日を拾うて歩く夏木蔭
振り向いて小さく手を振る白日傘

無心なる疏水の流れ遠郭公
千曲川秋立つ空を映しけり
むら薄揺れて夕日を弾きけり
コスモスの撮られ上手に揺れにけり
色鳥のこ糸の降りくる木椅子かな
天高し国の鎮めの大鳥居
色変へぬ松や寿ぐ二重橋
大嘗祭御装束の白極む
映りみる池の明るさ石路の花
池の面を錦に括る散紅葉
屹立の濠の石垣枯葎
白垂館淡き冬日に抱かるる
冬麗の人観覧車富士真近

当月集

安立 公彦選



○ 田中嘉信

父の腕に眠る赤子や新松子
団栗のまどかな温み日のにほひ
残る蚊に憩ひの木椅子追はれけり
明月や丹沢の嶺々闊深む
白萩の零れて永久の別れかな

○ 室井津与志

白妙の揺れて三密蕎麦の花
刈り終へし田の面せはしく鴨立てり
師の影や飯盛山さざえ堂の秋
なつかしき「とんがり帽子」秋の天
巢に集ひ談合もどき秋の蜂

○ 佐俣まさを

稲の穂の香りを葉る「みすず集」
「秋うららカップボードに選る器
駅前や蛇の目傘さす相撲取
曲がるまで見送るシエフや銀杏散る
西陣のソファアーに寛ぐ文化の日

○ 山浦紀子

太棹に見得切る桶屋村芝居
鼻埋めて喰らふ綿飴地藏盆
久闊を悔やむ夕べや温め酒
朽ち掛けのベンチが上座芋煮会
所在なき籠り居の午後林檎剥く

○ 中上馥子

両隣我が家も香る金木屋
何も彼も忘れ卒寿の月今宵
海中わたなかに溺れてゐるや鱸雲
小魚の動き敏捷水澄めり
でこぼこの仏頂面や榎 樝の実

春燈の句

安立 公彦選

植物園も稲刈り済ませ稲架掛に

秋深し何も語らぬ池の水

母の忌の供へる柿を選ひけり

長き夜や針の手休め観るドラマ

目覚めよき旅の初日や石路の花

秋の蚊をまとひ市より帰る夫

冬隣ダム湖は色を深めけり

捨てがたき服の数多や冬隣

竿灯の賑はふ町を横切りぬ

橋朽ちて山の紅葉始まりぬ

栗拾ひ上々吉の日和かな

殉教者へ思ひを馳する支倉忌

名月や妻と銘菓の舌鼓

真夜中に操る歳時記や文化の日

残照や崩るるままに木守柿

石牟礼道子句集の余白秋の果

東京 西谷恵美子

福井 西本 花音

宮城 澤田 明子

愛知 後藤 大

天守跡色なき風はくさむらに

瑕疵のなき雅やかなる今日の月

天と地のあはひ果てなき牧閉ざす

雑草の強き力や冬立ちぬ

金木犀雨上がるごと香を高め

朝顔の種出しそびれたる封筒に

句を成せと夜毎急かする鉦叩

ポケットに憂さ詰込んで行く花野

天逝の妹おもふ夜長かな 十月十日忌日

子を悼む父の長歌や銀木犀

灯火親し妹への追悼文集読む

『少年と犬』に涙や蔦紅葉

南瓜届く見慣れし古紙にくるまれて

久に逢ふ父母兄の名や墓参

コスモスと好みの酒を兄の忌に

栈橋の様変りせる里の秋

岐阜 高井 修一

京都 村上 國枝

兵庫 片井 久子

大阪 柿原よし子

